

が、そのまま途絶えているとのことであった。

そこで演者達が日本大学松戸歯学部歯科麻酔・生体管理学講座の渋谷教授にこの版本の経緯をお話し、同学部の歯学史資料館での保存・管理を許可いただいた。

その旨を住職に伝えたところ大変喜ばれてはいたが、以前の経緯上近江八幡市に保存・管理する意思が無いことを確認してから、演者達に返答するとのことであった。

その後、住職より近江八幡市に三折の版本を日本大学に寄付するがという旨を伝えたところ、近江八幡市郷土資料館側で管理・保存したいということとなり、演者達として大変残念ではあるが、水原三折ゆかりの地に版本が戻ったことは、しかるべき場所ということで極めて喜ばしい結果になったものと思われる。

今後は小児歯科医として関連のある『産育全書外篇7巻』に記述されている『乳疾』の項に関して、解説し報告したいと考える。

16) 口唇裂はどう描かれてきたか

Iconology of the Image of Cleft Lips

宗像市 竹原 直道

Tadamichi Takehara, Munakata City

本研究の目的は、口唇・口蓋裂に対する人々の眼差しの歴史的変化を明らかにすることである。そのために、遺された数少ない口唇・口蓋裂図像を対象に、口唇・口蓋裂がどのような意味を持つと認識され、表現されたかを考察した。

今日の視点からみると、口唇・口蓋裂はマイナスイメージが定着しているかにみえる。しかし今回調べてみると、弥生時代の複数の埴輪に、縄文時代の擬人化された動物像（山梨県上黒駒遺跡出土土偶など）とは異なり、明らかな口唇裂が刻まれていることを確認することができた。その人物は殯りの踊りを踊っていたり（埼玉県長瀬総合博物館蔵埴輪）、髪をみづらに結っていたり（和歌山市岩橋千塚古墳群大日山 35 号墳出土埴輪）することから、甞あるいは身分が上位の武人であろう。このように弥生時代において口唇裂は、超能力を示すプラスイメージ、あるいは多様な身体的特徴

=個性の一つ、として認識されていたのではないかと推察される。これらの埴輪像からは、少なくともマイナスイメージを受け取ることは出来ない。江戸時代初期の「訓蒙図彙」が、「兎唇」者を「侏儒」、「駝背」とともに下級の神官である神人として描いているのも意味のあることであろう。江戸時代から今日まで人気が衰えない「福助」も同じ文脈のなかにあるといえる。口唇裂は発生頻度がモンゴロイドにおいて高いといわれている。口唇裂図像は我が国だけでなく東アジアに広く存在するが、これらは必ずしもマイナスイメージだけのものではない。

一方、古代インドの仏教典「正法念処經」は、前世で「よき比丘をまどわした婦女は生まれ変わって兎唇となる」とし、中国の「乞丐図鑑」（16世紀）には、口唇裂を持つ放浪の旅芸人が描かれている。いずれもマイナスイメージである。「和漢三才図会」は、妊婦が妊娠中に兎肉を食べると兎唇の子が生まれると書き、兎唇患児誕生の責任を女性に押し付けている。兎肉は古代から疾病時の薬であったから、今日考えるよりも頻繁に食べられていたと思われる。さらに江戸時代後期に起こった妖怪ブームのなかで、妖怪を示す表象として口唇裂を用いる例が幾つか存在する（「霜夜の星」、「絵本百物語」など）。同様のことは近代朝鮮半島の仮面劇においてもみられ、口唇裂仮面は、痘痕、ハンセン病、などの仮面とともに、残酷な笑いの対象として造形されている（「朝鮮半島の仮面と童謡」）。

以上のように古代においては個性の一つとして捉えられていた口唇裂のイメージは、近代になるとともにマイナスイメージが強まっていったと考えられる。

17) 明治時代中期の開花新聞広告 補遺

Supplement to the Kaika-News Paper
Advertisement in the Middle Stage of Meiji
Era

大垣女子短期大学 下総 高次

Takaji Shimoosa, Ogaki Women's College

第 38 回（平成 22 年度）日本歯科医史学会で、